

OSAKA SHOKO SHINKIN BANK

CSR

推進室だより VOL.25

想いをカタチに

誰も孤立しない社会のために。

●新入職員CSR座談会

社会貢献賞/さくら賞受賞団体レポート
「聴く」のカタチ

●ココルーム●D×P●手話エンターテイメント発信団oioi
●ヘレンケラー自立支援センター●暁プロジェクト

CSR2019上半期活動報告

ソーシャルビジネスローンレポート



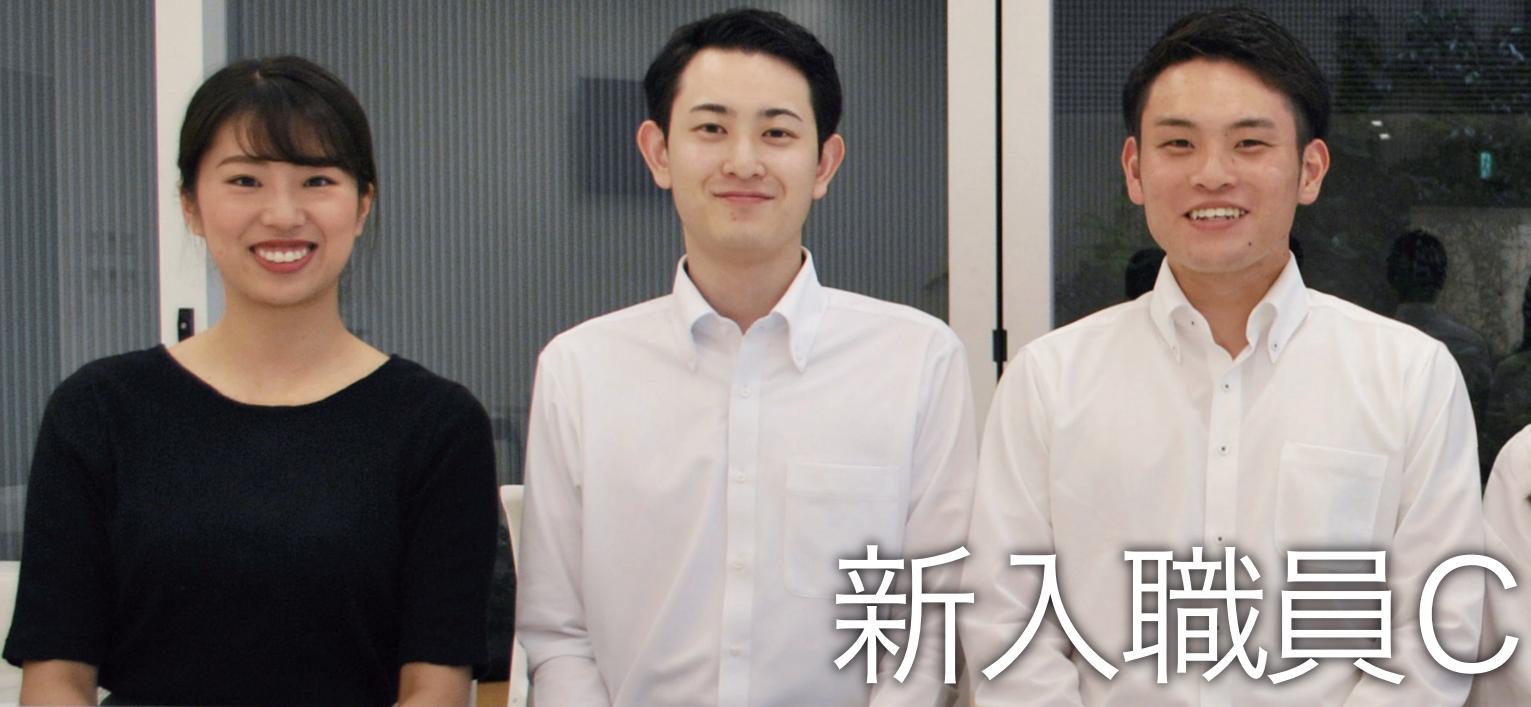
pixta



大阪商工信用金庫

誰も孤立しない

誰かが手を差し伸べるだろうじゃなくて、
その誰かが自分だと気付くべき。



新入職員C

Q1_CSRを知ってましたか?

- 「言葉だけは大学の授業で聞いたことがあった。」
- 「就活中に大阪商工信用金庫のホームページでチャリフェスの記事を読んで初めて知った。」



Q2_ボランティアの経験はありますか?

- 「熊本の震災の時に募金活動をやって、メッセージノートと義捐金を送った。あとは現地入りするメンバーの資金集めとか。」
- 「わたしはやったことがなかった。なんか見返りを求めてしまう気がして、ボランティアって心が優しくてすばらしい人がやるものだと思ってた。おばあちゃんもやってたから。」
- 「そもそもボランティアって無償って意味じゃなくて、自発的って意味。」
- 「そうなんや。自発的にすることという括りなら、できることがあるような気がする。」

Q3_なぜ当金庫がCSRに取り組んでいると思いますか?

- 「信用金庫であり、地域と近いからこそできることがあるからだと思う。」
- 「利益を求めるだけでなく、地域の為に何かすべきだと思う。社会貢献賞の表彰式で初めて知った。貧困家庭の問題や障がい者、発展途上国など問題は明確になっているから、それを拡散したい。寄付とか直接の関わり方はできなくても、広めることも貢献になると思う。」

社会のために。

自分から行動できる人になろう。
それを同期から広げていけばいい。



写真左から・吉田桃子・井藤玲・西村潤也・星加紗彩・成瀬茉也加・後藤紗希

●「私は卒業論文で子どもの貧困について調べた。日本で顕在化していないのは、食べられているし、服も着ていて外見で判断できないから。でも文房具を買うお金がないとか、塾に通えないとか、日本の水準に合わせた貧困の定義で考えるといっぱいいることを知った。」

●「私は子ども食堂の話を聞いて、昔コンビニでバイトをしていた時のことを思い出した。夜勤をしていた時、夜中の3時くらいに1万円札を持ってくる小さな兄弟がいて、常連さんだった。今思うとお金はもらってたけど食事は作ってもらってなかったんだと思う。」

Q4_当金庫のCSRはどう関わっていきたいですか?

●「CSR推進委員になるだけじゃなく、窓口でお客様にこんな社会課題とか、支援団体があると話す事でも関われる。」

●「CSR推進委員に情報をフィードバックしてもらって、それを伝えていきたい。」

●「忙しい日常に埋もれるのではなく、ふとした時に思い出すことが大切だと思う。常に一人ひとりがその意識を持てば、もっといいCSRができると思う。」

●「CSRを義務にしたくない。」

●「新入職員研修でやった植樹体験は研修の一環だったけど、一歩踏み出すきっかけになったと思う。実際やってみて楽しかったし、知る機会になった。」

●「なんでそれが必要なのかを知った上で活動することが大事だと思った。植樹も地滑り資料館と併せて実施する事で、やる理由がよくわかって納得できた。」



第13回「大阪商工信金社会貢献賞」「さくら賞」受賞団体レポート

CSR推進委員が受賞団体に聞きました。



■特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか(TIFA)

豊中市を拠点に、関西の在日外国人を対象に、共に住みやすい社会をつくることを目標に活動を行っておられます。日本語授業、就職支援、国際こどもキャンプといった異文化交流会等、様々な活動を行っておられます。日本で暮らす外国人が増加しているため、上記のような活動は本人、日本にとっても有益であり、全国的に波及してほしいと思いました。(西梅田支店 太田 圭祐)



■千里キャンドルロードプロジェクト

地域密着型イベントとして、2012年から始まり今年で8年目。地元千里ニュータウンの小中学校や幼稚園、保育園等多くの子どもたちが紙コップにそれぞれの想いを描き、キャンドルに火を灯することで素敵なイベントとなっています。当日は約1,300人のボランティアスタッフが参加し、10,000人超の来場者を集めるイベントとなっており、活動が根付いていることが分かります。今後もふるさとのお祭りとして、継続、発展することを強く願います。(東成支店 松本 優平)



■ちまちま工房

障がい者への支援活動を行っている団体が多いが、障がい者と同じ立場で共に働く当団体はこれからの支援活動に新たな可能性を見出します。また地元商店街のお豆腐屋さんとしても地域に貢献しており、更に地域活性化につながれば将来は飲食店の経営も考えておられます。現状の課題、将来のビジョンを持たれており、今後の活動に期待が持てる団体だと感じました。
(吉田支店 中野 仁貴)



■特定非営利活動法人 西成チャイルド・ケア・センター

子どもが健全に育つために必要な「食」をキーワードに、子ども食堂での食事だけでなく自然体験・学習支援も行い、「居場所」を提供しています。2021年には、親子が一緒に過ごせる家庭環境づくりのため、シェアハウス設立を目指しています。育った環境に左右されずに、一人ひとりが未来を思い描き、夢を持てるようにするために、子どもたちと共に過ごす時間は楽しみながらも、「子どもたちの未来のために」ということを常に考え活動されています。(事務部 長谷川 まや)



■NPO法人 にしよどにこネット

西淀川区を中心に子育て支援に関わる人に対して地域コミュニティを形成しておられます。情報誌の発行や子育てに関する座学講座、相談等活動は多岐に渡ります。代表である福田氏も主婦であることから子育ての大変さは知っており、気軽に相談できます。そんなコミュニティを目指して日々活動中。現在は更なる知名度向上の為にQRコード付きのステッカーを店舗、施設に配布することに努めていらっしゃいます。(京橋支店 松下 浩幸)

心豊かな住みやすい地域の実現を目指して、社会課題・地域課題の解決というミッションに取り組む団体を顕彰することにより、持続可能な社会を目指すこのような活動の輪が大きく広がることを期待し、「大阪商工信金社会貢献賞」を実施しています。また応募団体の中から、職員が応援したい団体を「さくら賞」として選定し、表彰しています。



■箱の浦自治会まちづくり協議会

箱の浦自治会まちづくり協議会の皆さんの活動としては主に、高齢の方にとって難しい「外に出る」「よく食べる」「よく喋る」といった項目を楽しくできるような場を提供することです。サロン(空き家を賃借した憩い、交流の場)や高齢者だけでなく、子どもたちがのびのびと成長できるように学習・遊びの場を設置しています。資金源としてはダンボールを回収し、市へ売却することで資金を得ており、環境にも良い活動を行っています。(八尾支店 村上 由彦)



■認定NPO法人 ノーベル

「子どもを産んでも女性が当たり前に働ける社会にしたい」この想いを実現するためにノーベルを設立しました。当日の朝8時までなら100%お預かりする訪問型病児保育事業を、誰もが利用できるサービスとなるよう目指しています。また、共済型を採用することや、寄付金を活用し、安定したサービスを提供できるようにしています。今後は利用者の方からの要望に応え、病児対応型の保育園の運営を考えておられます。(西支店 松村 亮)



■株式会社 ラヴィコーコレーション

株式会社ラヴィコーコレーションは、「パパママカレッジ&マタニティサロンHugMe」を開設し、女性が子育てを機に仕事、キャリアアップを諦めないように夫婦や企業に対して子育て講座を開催。また、女性のキャリア形成を図るために、研修等を実施し、女性が「産む・育てる・働く」を容易にできる社会を目指しています。

(生野支店 権田 康徳)



■特定非営利活動法人 日本こども支援協会

社会的養護が必要な子どもたちの根本的かつ永続的解決として、里親制度の普及を目指し、10月4日の「里親の日」に啓発活動を全国で展開しておられます。子どもたちに対する痛ましいニュースを目にする度、心を痛めるばかりで何か他人事であったのかもしれません。まずは里親にもさまざまな種類があることや里親のことを周囲の人に広げるなど私たちにもできることから始めようと思います。

(今里支店 吉本 啓記)



■特定非営利活動法人 ファザーリング・ジャパン関西

昨今、家庭における父親の育児参加の在り方が社会問題になっています。父親の意識としても育児に積極的に関わりたいと思っていても、具体的に何をしていいのか分からない。「やらないといけない」といった義務感から、育児に関わっても楽しさを感じづらいので育児に参加しないという傾向にあるそうです。ファザーリング・ジャパン関西は「父子留学」等のイベントを通じて父親が育児に楽しく取り組めるような社会作りを目標に活動しています。(八尾支店 丸岡 俊貴)

耳で
聴く。



NPO法人 こえとことばとこころの部屋cocoroom

聴くときは、話しの先を読まない。

詩人として活動していた母の影響で芸術に触れながら育った上田さん。9年間のコピーライター時代に余暇で詩の朗読会を開催、31歳で詩を仕事にする事を決意し、大阪市の事業として新世界フェスティバルゲートにアートをテーマに芸術家の集う場を構える。2007年に新世界での事業が終了し、事務所の移転先は西成に決めた。5年余り新世界にいて、となりの釜ヶ崎に関心を持っていた。段ボールを積んだリヤカーをひくおじさんのハモニカの深い音色、野宿小屋の壁に貼られた自作の俳句の含蓄。心を奪われた。「日本の道や橋やダムを作り、建物を作ってきた人たち。並々ならぬ働きが日本を支えてきた。そして、時代が変わり、仕事を失いホームレス状態になった人が、心ひらいで表現してくれたものにわたしは心うたれる。生きるか死ぬかの町には、芸術の源泉があるんじゃないかな。そこで暮らす人たちが何を考えているのか「聴きたい」と思って、釜ヶ崎で喫茶店のふりを始めました。(笑)」

様々な背景を持つ人たちが集う喫茶店で、お客様から「聴く」ことで、相手の人生を知り、そこから次の活動を企図することもあるとのこと。

「その時々にお客さんでいらした方から聴いた話をもとに組み立てていて、今は井戸を掘っています。アフガンで井戸を掘ってた人が、特殊な機材を使うわけでもなく、住民たちの手で堀り直しができる持続可能な方法、「それを日本で伝えてないんだなあ」とポロっと話されたんです。それと災害対策と釜ヶ崎芸術大学が繋がって、おじさんに先生になってもらおう! そこからやり始めました。記録も作ろうと思って、クラウドファンディングで資金を集めているところです。」

「聴く上で大切にしている事は先読みをしないこと。言われたことをまず受け止める様にしています。」ココルームでは、ホームレス状態の人、ニートの若者、発達障がいを抱える人、社会で孤立しがちな人たちを個人として受け止め、一緒に何ができるのかを考える場を設けておられました。

「自分の発した声の一番最初の観客って自分なんです。発話するということは他者に向かっているけど、自分の中にいる他者を動かしていくんじゃないかなと思う。話す前に聞くがあるんです。」と話してくれた上田さん。まずは「聴く」を通じて自分を知ることから始めてみませんか。

DXP
CAFE

心で
聴く。



否定しないで、一人ひとりに向き合う。

就職して高校生に向けた大学を紹介するフリーペーパーを作成する仕事をしていた熊井さん。

「就職率ばかりを全面に出すことに疑問を感じ、もっと色々な生き方があるのではないかと考えていた時、D×P代表の今井さんの講演を聞いたことがきっかけで、当団体で広報として活動に関わるようになりました。」

認定NPO法人D×P（ディーピー）では、通信・定時制高校の高校生に「つながる場」と「いきるシゴト」「いきる暮らし」を提供するべく活動しています。経済的に苦しかったり、発達障がい・学習障がいをもっていたり、過去の経験から人間不信になっていたり、様々な事情を抱えた高校生に向けて、人とつながる場を教室のなかにつくるため、「クレッシェンド」の授業をしています。社会人ボランティア”コンポーザー”と、高校生の対話を軸とする全4回のプログラムです。

熊井さんにクレッシェンドのお話を伺うと

「イヤホンをつけたままずっと下を向いてしゃべらない生徒もいます。でも、もしかしたら音楽は流れていなくてこちらの話を聞いているかもしれない。イヤホンをついているから聞いていないとは決めつけないで、否定せずに関わるという姿勢を大切にしながら、一人ひとりの生徒に寄り添っています。」

授業ではまずコンポーザーが自己開示を行い、生徒はそれに耳を傾けます。様々な年齢やバックグラウンドを持つ人の話を聞き対話していく中で、高校生が、この人になら自分のことを話してもいいかなと思えるような関係性を築いていっています。」

クレッシェンドで大切にしている事は

①「ひとまとまり」ではなく「一人ひとり」と向き合う②否定せずに関わる③様々な年齢やバックグラウンドの人から学ぶ。この3つを大切にしながら、たくさんのコンポーザーが集まって高校生と関わっています。そうやって対話をしていくと、1年生の時は全く話さなかった生徒が、2年生で出会った時に名前を覚えてくれていて、声をかけてくることもあるそうです。話を聴き寄り添うことで、つながりが生まれます。つながりがつくれず、自分のこれからに希望があるとは思えない、そんなふうに思っている高校生がたくさんいます。あなたにもできることがたくさんあると思いませんか？

目で
聴く。

手話エンターテイメント発信団oioi

聴こえなくても、相手の唇や、手の動きで。

在宅で仕事をしながら活動に参加する中川さん（写真左）と手話パフォーマンスで生きていくことを決めた石田さん（写真右）。メンバー33名、1/3が聴覚障がいをもつ方で構成されており手話体操や手話コント・手話歌・ワークショップを開催し、楽しく手話を広める活動を行っています。

聴覚に障がいをもつ中川さんにoioiとの出会いを聴くと、「大学で先輩に練習に連れて行かれたんです。勝手に舞台の参加が決まっていて、最初は全然乗り気じゃなかった。自分から聴こえないことを発信することに抵抗があった。でも舞台に立つとお客様から反応が返ってくる。聴こえないことをネタにし、それを笑いに変える。お客様が笑ってくれることが、自信につながり、聴こえないことを受け入れられるようになりました。」「手話を始めてからいろんな人と知りあう事ができ、話ができる。世界が広がりました。大学でoioiと出会うまでは障がいをもっていることを隠していました。1対1なら読話（読唇）でも十分コミュニケーションが取れるので、手話を使わずに生きている人も多いと思います。でも僕がそうだったように、障がいをもつ人が手話を覚えることで自信を持つことができるかもしれない。だから手話を広めたいんです。」と中川さん。石田さんは「手話は仲間との大切なコミュニケーションツールであり、自分を表現する武器でもあります。手話を使いはじめてからコミュニケーションの壁が壊れ（バリアクラッシュ）、同時に自分の世界が広がっていくのを実感しています。」と語ってくれました。

中川さんのお話で印象に残った事は、「手話を1つだけでも知っていたら、その手話で話しかけてほしい。それだけで心の扉が開かれるように思います。その後は筆談でもなんでもコミュニケーションはとれるんです。」という言葉。手話をマスターすることが大切なではなく、ウェルカムな姿勢を見せることで壁が一つなくなるのだと知りました。右の写真の手話は「アイラブユー」という意味。ぜひみなさんも使ってみてください。



手で聴く。

NPO法人 ヘレンケラー自立支援センター

見えなくても、手話の動きに触れられる。

視覚障がい者の支援を目的に就労継続支援B型やグループホーム、居宅介護など幅広く事業を展開し、今年で20周年を迎えるNPO法人ヘレンケラー自立支援センター。

事務局長であり、ご自身も聴覚障がいをもつ石原さんに支援を始めたきっかけを伺った。

「ろう者の団体から料理教室の講師の依頼があった時、盲ろう者が参加していた。教室が始まり、説明をしている時に1人だけ前に出てこない男性がいた。時々その人を見ると、となりの男性と手を繋いでいて、恋人同士なのかと思った。でもそれが触手話であり、盲ろう者と初めて出会った瞬間でした。こんなに身近に盲ろう者がいるのかとショックを受けました。もともと自身が聴覚障がいをもっていること、主人の父が視覚障がい者だったことから、日頃から2人で一人前だと思っていたが、盲ろうという状態が身近にあるという事実に驚き、聞こえないが為に目を酷使している自分もいざれそうなるのではないかと不安に思ったことが何か支援したいと思ったきっかけでした。」

センターを利用する方は全盲ろう、弱視ろう、弱視難聴、弱視ろうの方、病気などで中途失明失聴を患った人等様々で、触手話や指点字、手のひら書き、メガホンの使用など通訳もその数だけありコミュニケーションの方法は多岐にわたること。

触手話とは手話をする手を直接触りながら読み取る言語のことです。視覚も聴覚も持たず、外部から得られる情報が極端に少ない盲ろう者。家族とのコミュニケーションにも苦労し孤立しがちな彼らが、触手話によって情報を得るだけでなく、仲間ができコミュニティが広がるのであります。

読者へのメッセージを伺うと

「盲ろう者にもっと出逢ってほしい。失敗を恐れず手を差し伸べてほしい。支援のやり方は支援を必要とする本人が知っていますし、初めてでも教えてくれます。手のひら書きだったらほぼ100%通じます。」と話してくれました。支援の方法がわからないからと敬遠するのではなく、一歩踏み出す勇気をもってみませんか。

素で
聴く。



暁プロジェクト

偏見を持たずに聴いてほしい。

「暁project」として、教育関係者や小学生へ向けたLGBTの周知活動や当事者たちの相談に応じている大久保さんに活動を始めたきっかけを伺った。

「大阪で教員をしているトランスジェンダーの友人から、教員向けの研修で自身の経験をもとにLGBTの話をしてほしいと言われたのが始まりでした。そこから小学生向けにも依頼が入るようになり、今では様々な団体から講演の依頼があります。特に子どもたちからの反応は、偏見のない素直なものが多く、少しでも早い段階でLGBTについて知ってもらう事が大切だと感じています。」

女性として生まれた大久保さんは、幼少期より自身の性別に疑問を感じていましたが、小学校で女の子を好きになったことが噂になり、怖いと思った。そこから気持ちを隠して生活してきました。社会人になり、セクシュアルマイノリティとの多くの出会いをきっかけに、30歳を目前に自分らしく男性として生きることを決意。「性同一性障がい」の診断を受け、ホルモン注射、乳腺摘出・子宮全摘出手術を経て、31歳で戸籍を男性としました。その後ご結婚され、現在はLGBTの啓発活動を行っています。

「LGBTは普通の人たち、幸せに生きている。普通じゃない、かわいそうと勝手な妄想を持つのではなく耳を傾けることでわかることがあると思います。偏見がない人もその次のステップとして意思表示をしてもらえるととてもうれしい。SNSなどでLGBTを肯定的に載せてくれるだけでも、受け入れる体制がある、知っていると示すことができます。それがあるだけでカミングアウトしやすくなります。」と話してくれました。

11人に1人がセクシュアルマイノリティと言われている現代社会。性同一性障がいを持つ人が戸籍上の性別を変更する為には様々な手術を経なければならず、特に日本はそのハードルが高いと言われています。社会通念に捉われず、人の違いを受け入れ、みんな違う、同じ人間など一人もいないということを理解し、マイノリティの人たちも幸せに暮らせる社会を目指し、LGBTに限らずマイノリティの人たちに耳を傾けてみませんか。

音で
動く。

CSR2019上半期活動報告

○フロアバレー交流会 2019年3月21日(木)

第9回「さくら賞」受賞団体「NPO法人弱視の子どもたちに絵本を」とのコラボ企画として、当金庫役職員と団体会員の子どもたちとのフロアバレー交流会を実施しました。当日は大阪府立南視覚支援学校にご協力いただき、会場提供とフロアバレー部員及びOBによるレクチャーを受けることができました。参加メンバーのほとんどがフロアバレー初体験でしたが、半日のスケジュールの中で声だしから試合まで行うことができ、スポーツを通じて、視覚障がいをもつ子どもたちと当金庫役職員、学生との相互理解を図ることができました。

※フロアバレーとは全盲や弱視の視覚障がい者と健常者が一緒にプレイできるように考案された球技で、6人制のバレーボール競技規則を参考にしています。チームは前衛3名、後衛3名で構成され、前衛選手はアイマスクを着用し何も見えない状態でプレーし、後衛選手が声で指示を出すので、味方の声を聞くことが非常に重要なパラスポーツです。

○新入職員研修 2019年4月17日(水)

商工の森植樹体験&亀の瀬地滑り資料館見学

新入職員研修の一環として「大阪商工信用金庫の森」にて、新たに20本のヤマザクラを植樹しました。新入職員33名が参加し、特定非営利活動法人日本森林ボランティア協会のみなさんの協力の下で、穴掘り→植樹→添え木の設置の工程を行いました。また亀の瀬地滑り資料館では、昭和36年から続く亀の瀬地滑り被害の歴史と、現在でも24時間体制で監視が続けられている亀の瀬地滑り対策工事の詳細を学び、職員自身がCSRとして「大阪商工信用金庫の森」を管理している意義を再確認しました。



○信用金庫の日 2019年6月14日(金)

6月14日の「信用金庫の日」にご来店されたお客様に“緑の苗”(ペチュニア)をプレゼントしました。このプレゼントは、「商工さくら基金」の目指す「生き生きとした住みやすい街づくり」の一環として、大阪に笑顔と緑の輪が広がることを期待して行っています。

今を聴く。

NPO団体の夢を応援する 【ソーシャルビジネスローン】レポート



■認定NPO法人D×P（ディーピー）

一人ひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会をつくるため、経済的困難・不登校状態、発達障がいなど、さまざまな生きづらさを抱えた高校生が多く在籍している通信・定時制の高校を主なフィールドにして高校生をサポートしています。若者がどんな境遇に置かれても、自分の将来への可能性を感じられる社会の構造をつくることを目指し、「人とつながる場」「いきるシゴト」「いきる暮らし」をつくる3つの事業を行っています。

●借入金額:500万円

●借入日:2016年8月19日 ●借入期間:3年



Q1 資金調達の方法として借入を選ばれた理由を教えてください。

A.当時、認定NPO法人D×Pは年間5,000万円ほどの予算がある中の大半を寄付で運営しており、これまで資金調達の方法が限定されていました。経営として戦略的に事業に取り組むための資金が不足していました。なので、当法人としては寄付型のNPOとしても融資を受けてより寄付を集めることができないかということを模索しており、大阪商工信用金庫に融資していただきました。

Q2 借入資金はどういったことに使用されましたか？

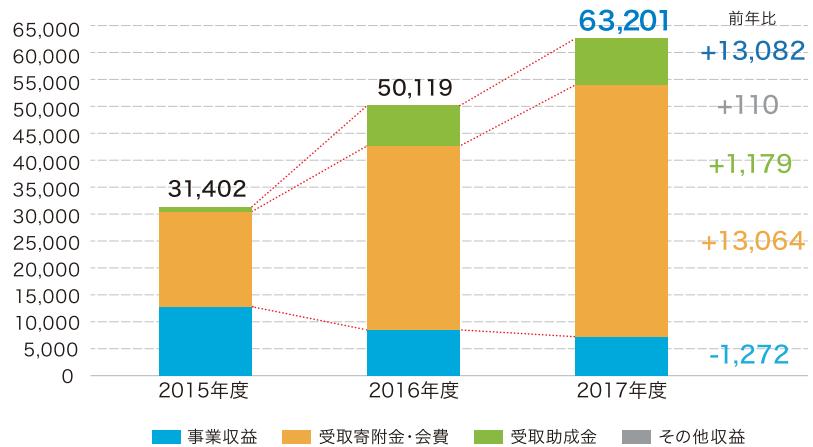
A.融資していただいた当初、広報のスタッフが1名しかいなかったため採用のための資金の一部に使わせていただきました。その結果、寄付や広報のメンバーを充実させることができ、活動内容がより伝わりやすくなり、融資していただいた当初よりも全体的な予算も2,000万円以上増えています。

Q3 借入を行うメリット・デメリットを教えてください。

A.メリット:NPOとして融資を受けることで返済していくれば返済実績にも繋がります。

デメリット:今のところは感じていません。

● 経常収入 3期比較 (単位:千円)



Q4 他の事業者へのメッセージ

A.大阪商工信用金庫のようなNPOに対して理解があるところがあるからこそ、社会的なインパクトのある事業ができるので、ぜひ活用してほしいです。

※詳しくは
お近くの大阪商工信用金庫の
各支店窓口でお気軽にお問合せ下さい。

この印刷製品
は環境に配慮
した資材と工場
で製造されて
います。
GREEN PRINTING JPN
P-B10114